２０１６年6月１６日（木）書き始め～　著：岡本　悠
２０１６年１２月６日（火）完成

題「半到（はんとう）」～岡本悠、３４歳と６か月の自叙伝～

まえがき

この本は、最初は２０１７年6月１９日の３５歳丁度に、発表するつもりだった。だから、あと何か月間もあると、呑気に書いていた。でも、ある日、書きだしたら止まらなくなってしまった。結局最後まで書ききってしまい、２０１６年１２月６日の３４歳と６か月で完成してしまい、区切りの３５歳まで待つ事にしないで、もうどんどん出していく事にした。

実は３２歳の時に、その頃 HP（ホームページ）では出していなかったが、「岡本悠３２歳の自叙伝」という、１人で、対話形式で書く小冊子を作った。３０ページ位もある。ただ、それは、かなり深刻な内容なので、読み返しても自分でも嫌だったから、人がちゃんと普通に読めるような本で、本当は３５歳の区切りで発表したいと思った。

題の「半到」とは、寿命が７０歳位だとしたら（それ以上でもいいし、それ以下はよくわからないが、）だいたい半分の３５歳という意味だ。きっちり３５歳ではなくて、だいたい３５歳位に辿り着いたという、料理屋の「のれん」のような感覚である。

あと、「半到」という発想は、サッカー日本代表 FW で、現在イングランドのレスターで２年目を迎えている、岡崎慎司選手の本、「未到」を少し真似させてもらった感覚がある。岡崎選手の場合は、たぶん、１年目にレスターが優勝しても、自分の成績に満足がいかず、「未だ到っていない」という意味なのかもしれない。

書いていて思ったのは、昔の頃の方が、いろいろな思い出があるのに、社会人やもっと大人になっていくにつれて、あまり変わった事もなく、同じ様な毎日を過ごすから、書く事がないな、と感じた事だ。

まあ、それでも私は、「プロレスコラム」を書いたり、「本」を読んだり、「音楽活動」をしたり、「本（小冊子）」を書いたりしている。そして、ハンバーガー等を食べながら、録画した HDD（ハードディスク）を見たりしている。近しい人にハガキを贈るとか、仕事の上司には話を聞いてもらっている。受け身の読書ばかりになると、本が好きでも煮詰まってくるが、とにかく、今の自分は、自分から生産的な活動をする事が大事。でも、たくさん書けば煮詰まるから、「プロレスコラム」はできるだけでいいから続けようと考えている。それも苦しいと思ったら、休むとか、書くのを辞めてしまってもいいと思っている。

最近は、あまり共感を呼ばないだろうが、「逃げるのも人生」「物事に対し逃げ回るのも人生」だと思っている。ただ「攻める人生」もいい。だから良くわからない。自由。

ただ、私は今の生活に金銭面の稼ぎ以外は、ほぼ８０％近く満足している。でも書く事や音楽活動もなくなると良くない。とにかく自分に課した作業だけはこなしていきたい。

幼年時代

　１９８２年６月１９日。東京で産まれた。父・母・兄・姉・そして私、の５人家族。つまり、３人兄姉弟（きょうだい）の末っ子として産まれた。

　大相撲が好きで、北勝海（元・横綱で、現八角理事長）のファンだった。負けた日は狂ったように泣いていた。泣きすぎて、そのまま寝てしまった事もよくあった。今も豪栄道などは好きだし、今でも八角さんは好きである。

　よく家では一人で遊んでいた。紙相撲を作ったり、卓球場を紙で競馬場に作りかえて遊んだり、タカラという会社のプロ野球カードゲームで遊ぶ事もあった。東京ドーム型のビッグエッグ野球盤というオモチャでも遊んだ。とんねるずの仮面ノリダーの真似をして、柔術家のヒクソン・グレイシーのように、布団の端から端まで巻かれて、手や足が使えず脱出できないシチュエーションにして「やめろ、やめるのだ！！」という遊び等もやっていた。

　また、大相撲に戻るが、親戚の会があった時、おじちゃんにお相撲で稽古をつけてもらって、６時前に北勝海が出てきたら、おじちゃんが「悠の心臓がバクバクしているぞ！」と言われる位、応援していたのを覚えている。その時は確か北勝海は勝った。

　ある日は家族５人で、大相撲を両国国技館に観に行ったら、北勝海は寺尾に敗れ、応援の声援をあげていたので、近くのおじさんが「残念だったね。」と冷やかされたのが悔しかった。

　そんなわけで、やがて幼稚園に入ったが、その頃は長距離も短距離も速かった。ただ、速かった上で過ちも２回起こした。１つは長距離で、毎日、朝マラソンの時間があるのだが、いつも１位だった。しかし、その日はある子に先を行かれ、２位を走っていた。「しまった！」と思い、つい、その子の洋服を掴んで１位を奪おうとしてしまったら、その子が泣いてしまった。幼稚園の先生からは、特に怒られなかったけれど、「駄目ですよ。」位の注意は受けたと思う。もう一つは幼稚園の運動会が近づいた短距離走で、私は長距離には自信があったが、その頃は短距離も速かった。でも、これも違うある子は短距離が速くて、速い者同士で一緒に走らせるから、２回位やって、２回とも負けた。ただ、スライディングをして１位になろうとしたら、幼稚園の先生から、「滑るのは危ないから禁止です。」と言われた記憶はある。

　で、幼稚園ではほとんどドロ刑という遊びと、リレーをよくやった。ある日、自分はドロ刑がやりたかったのに、間違って「リレー」と言ってしまって、「ドロ刑」と言い直せばいいのに引っ込みがつかなくなって「リレー」と言ったら、「じゃあ、じゃんけんで決めましょう。」となって、私は負けて、「ドロ刑」になったから、しばらく泣いていたけれど、途中から「入れて」、と言うと入れてくれた思い出もある。

　幼稚園では、女性の園長先生は、よく覚えているけれど、あともう一人お世話になった先生がいた。だけど、一番、覚えているのはバンビ？みたいなかわいい女性の先生がいて、ああ、綺麗だな、と。初恋は幼稚園の先生だった。

小学生時代

　小学校の頃の私は元気だった。活発な子供だった。なんか逆に嫌な思い出が少ない。でも、不真面目でヘラヘラして、大笑いして、爆笑していたから、そういう印象なのかもしれない。
　小学校の最初の頃は、冬でもランニングシャツに半ズボンで通っていたから、道行く、おじさんやおばあさん等が「寒くないの？」とよく聞かれて、「寒いです。」と返していた。
　それで、幼稚園の時同様、小学生の時はいきなりだけど、高学年、中学まで、長距離走やマラソンは速かった。思えば、近くの大きな公園でいつも自分なりに、ランニングとかしていたから、苦労しなくても速かったのだと思う。あの頃は何故、自分だけこんなに速いのだろうと思って走っていた。勉強がよくできる人も、もしかしたら同じ感覚の人もいるかもしれないと今なら思ってしまう。ちなみに私は勉強に関しては、今３４歳でも全く駄目。馴染めない。読書は簡単なのはよく読むけれど。
　小学校１年生の時に、世田谷区のわんぱく相撲大会というのがあって、結論からいうとその大会で優勝した。予選はよく覚えていないけれど、ベスト４で大柄な体格の子で、まるで将来の力士みたいな体型の子だった。その子の後援会のような応援団がバーッとたくさんいて、私の応援は、母一人、逆側のスタンドにいた。そして立ち合いで、立つと押される、押される、でも最後は「うっちゃり」という決まり手で勝った。決勝は自分より小さい子で勝てるのではないか？と思ったけれど、先ほどの取組みと同じで、最後は「うっちゃり」でまた勝った。晴れて私は優勝する事ができた。
　ちなみに小学校２年生の時にも参加したのだけれど、初戦は「もろ差し」をくらいながらも力で投げ飛ばしたら、審判のおじさん２人が「凄い！」とか「強い！」って言ってくれたのだけれど、２戦目の大柄の子の試合で立ち合いに、はたいたら（交わそうとしたら）押し出されて負けた。でもこの時にちゃんとぶつかって行く姿勢とか非常に人生の分岐点というと大袈裟だけど、大事だと思った。最近も大相撲見ていて、はたいたら駄目だと思ってしまう。どんなに相手が低い、下しかみてないような相手でも受け止めるくらいじゃなきゃ駄目だと思った。それ位の経験ができた負けだったから良かったかもしれない。悔しいけれど。
　ついでに小１に戻るけれど、弦巻神社で相撲大会があって、規模は小さいけれど優勝した、小１では２冠王だった。
　それで、小３からしか入れないのだが、小２から軟式の少年野球チームに入った。小２と小３の時、所属した、毎週日曜日に通った。中学受験に備えそのまま辞めてしまったけれど、最後６年生の時、特別にバッチをいただいた。背番号は最初から３８番・２１番・２番だった。
　で、最初はボールが怖いから「もう行きたくない」って言ったけれど、母が「続けなきゃ駄目よ」って言ってくれて、続けているうちに上手くなっていた。でも、家の前でよく一人で壁に向かって練習していた。バッティングより守備の方が好きだったけれど、「痛いのが嫌。」というタイプで、ゴロは嫌だし、硬球のボールは苦手で、高校の時、野球部に入らな

い理由の１つだった。

その小学校の軟式野球チームの思い出は、親子大会があったのだけれど、そこで、私は逆側のグラウンドから見ていたら、父がバッターで右中間に抜けるヒットを打って、どんどん転がって、父も走って、走って、三塁も回って、確かに確実にタイミングはアウトかな、という感じだったのだけれど、監督さんが審判やっていたから、「セーフ！」とジャッジして、私も凄く嬉しい気分になって。「お父さん、凄いな！！」と思った。ただ、その後、守備につかないから、あとで「どうしたの？」と聞いたら「肉離れを起こした。」と言っていて、更に感動した。

父には、家族等でよく千葉のスポーツセンターとかにも連れていってもらった。公園ではアメリカンフットボールの練習も一緒にした。

もう少し軟式野球チームの話で、小２の時、１打席目にバントヒットをした。２打席目も自信がないのか、バントヒットを狙ったら、ファールになって、監督から、「バントなんかしないで打ちなさい。」と言ってもらえた事を今も覚えている。まだ、小さい時から「せこい」事を覚えるな、という事だと思う。

あとは、セカンドを守っていたら、ショートゴロでダブルプレーを狙う為、２塁に入ってボールをキャッチして、一塁に投げようとしたら、足にスパイクのスライディングを食らった。あれは血も出たけれど、痛かった。これはメジャーリーグでも、プロ野球でも禁止にしてほしいものだ。

小３になってからは、塾に日曜日に行く事になった。だから、軟式野球チームは辞めなくてはいけない事になった。

結論的に塾は、上と下のクラスがあったら、ずっと下のクラスだったが、ランニングシャツで授業を受けていたら、肌をパシパシと叩かれ、「こんなの勉強する格好じゃない」と言われ、痛すぎて嫌になり、塾を辞めた。

小５で隣のクラスの T さんに恋に落ちた。仲の良かった男友達に秘密にしてもらい、一緒に、１人で授業を受けている T さんを覗いて、「おお、すげー！！」みたいな風になっていた。しかし、ある時、違う男友達に言ったら、いろんな生徒にばらしてしまい、あっという間に、T さんは感づいてしまったようだった。それが小５か小６だった。

自分はだんだん、同じクラスの N さんを好きになった。覚えているのは、屋上でしょっちゅう話しを、その N さんを含めた６人でした事。で、ある時、先生に、そんな単刀直入ではないが、「あなたは、誰と組みたい？」と言われ、「僕は N さんです。」ときっぱりと言った時、N さんが少し戸惑っているような感じを受けた。その後、N さんから「交換日記しよう？」と言われ、全然自分が続けられなかったけれどしたし、６年生位の時にまた軟式野球部に顔を出してゴロをさばいていたら、N さんの姿があって、自分は恥ずかしくて知らないフリをしたが、応援に駆けつけてくれる優しさがあった。

そして、勉強は全くできなかった。小学生のテストでもかなり低い点だったので、これは相当頭が悪いと実感した。ただ、最後はある知り合いのおばさんの家に通い、特に国語を強

化してもらい少しは頭が良くなった。ただ、本当の頭は野球の事が一杯で、その頃、丁度、「１０．８決戦」という、巨人対中日のセ・リーグのいわば同率優勝決定戦があった。史上初の事だった。この日はおばさんの家で勉強した後、速攻で、電車で帰り、松井秀喜や落合博満が打ち、落合や立浪和義がケガをして、巨人が槙原、斎藤、桑田のリレーで長嶋茂雄監督が胴上げで宙に舞った。

で、私は小６の卒業式を迎えた。小５の女子２人がスポーツマンの自分に憧れてくれたのか少し好きだったという感じは知っていた。プロポーズはされなかったけれど、最後は５年生が我々６年生をアーチで送ってくれた。その２人も近づいたら「キャッキャッ」と少し叫びながら、「さよならー」と言っていたかもしれない。そして、その日も帰っていると、後ろからＮさんとその友達が後ろから、最後のお別れなのかついて歩いてきてくれたが、私は上手く処す事が出来ず、何も言わず別れてしまった。話は前後するが、私は受験に合格していたし、Ｎさんも違う中学に進むので、お別れだった。ただ、後日談だが、２０歳の時にある男友達から「同窓会を開いてくれ」と頼まれた。その時、Ｎさんに電話したら、「同窓会には行けない」という事だったが、電話をして話す事ができた。あまり書くと悪いので書かないが、自分の夢の職業に就職したという話を聞けた。私は「おめでとう！！」と言った。

中学生時代・高校１年生時代

正直、中学・高校（中高一貫学校）は、高１を卒業したタイミングで辞めたのだが、あまり良い思い出がない。でも、自分を掬（すく）ってくれたのは、中学軟式野球の部活だった。

まず、野球の話の前に、中１と中２の時に１学年１５０名位いる中でマラソン大会を２年続けて２位になった。２年連続同じ人が１位になった。中３の時は途中で歩いてしまい、１５位、自分に負けた時だった。高１の時は野球部も辞めていたから、そして、私も学校ではなく不登校の生徒の塾に行ったりしていたから、高１のマラソン大会では二十何位まで落ちた。

野球部は１年生の時は皆レギュラーになれなかった。いつも先輩達の試合を観に行った。２年から３年の最初までが、普通、一番レギュラーになれる時期で、そこで監督から、副キャプテンと５番ファーストを与えてもらった。ファーストミットも買っていただいた。

そのレギュラーの前に１年生の時、順番に壁当てやノックをして回る練習があったが、後にエースになる人は上手かった。他にも明らかに筋力がありそうな人もいたが、その２人位を巧いと思った。

そして２年生になると、レギュラーで試合に出るようになった。背番号はファーストだから３番。中学野球の試合はほとんど出たが、三振は１回だけしかしなかった気がする。家では素振りをするとか、壁当てで内野ゴロの練習をたくさんした。野球部の仲間とバッティングセンターに行く事もあった。ただ、バッティングセンターでは、ライナーが飛ぶように打てるのに、試合になると全くと言っていい程、ライナーやホームラン性の辺り等は打てなか

った。大した事ないかもしれないが、１日１００回位の素振りをした。ある日の最高は１日１０００回やって体がボロボロに疲れたのを覚えている。

ファーストの守備は「岡本君に飛べば大丈夫」と言ってくれる人もいたが、たまにミスする事もあった。逆に打撃は自分達のチームは全くと言っていい程、得点が取れず、いつもエースの投手に頼りきりで、１－０とかで勝ったゲームが多いのではないだろうか。

打撃の思い出は、まずは、バットの先に当たった辺りが、一塁線を抜けてサヨナラヒットになった記憶がある。２つ目は、レフトオーバーの同点タイムリーツーベースヒット。おまけで３つ目は、当時の父が撮影してくれたビデオカメラに映っていたものだが、センター前へのヒットを打っていた。しかし、この後、盗塁を失敗していた。

そのうち私も目が悪くなっていった。当時テレビゲームをやりすぎたのかもしれない。ノック中に「暗くなってきたから見えないです。」と言った日があったが、自分の目が悪くて見えなくなってきたのかなとも感じた。

いつも１５０人中１５０位争いをする程、退学間近で、なんとか粘るという勉強の奇跡はあったが、１回だけ、数学を父親にみてもらい、先生が改まったように「岡本君、何点（高得点の意味)」というと、周りが騒いでくれた。自分でも全教科で例えば、１００点中９０点のような得点を取れた事はなかったが、これは私も嬉しかったし、クラスの親の方達がお世辞でも「岡本君は、本当は勉強できるのね。」と、１回限りしか起こらなかったが母をとても喜ばせた。

ただ、私は友達を作るのが苦手だった。３０代の今でも、その辺は全く駄目。男子校だったのもあるが、恋人を作るのも全く駄目だ。

私は、野球部の中学野球を卒業した後、陸上部の顧問の先生からも軽く誘われたが、野球の方が好きだったので断った。高校野球（硬式野球）はボールが堅く怖い印象があった。当時の巨人軍のサード・江藤智選手が強烈なゴロを顔面に受けて、目を痛める映像を見ていたので、高校野球は辞めようかな、と思った。無論、レギュラーから外される事を少し警戒した。高校には野球が巧いのが３人入るとも聞いていたし、高校野球の練習でサードのノックを受けたらゴロが足に辺り、痛くて動けなかった。背番号なしの白虎隊で応援隊に回るのだけは嫌だった。そして、教室では喋る友達もいなくなり、よし、もう退学しよう、と決めた。しかし、高校１年で出席した、単位が足りず、嫌でも何日かは学校に行かなければいけないという事だった。恥ずかしいけれど、嫌なところに顔を出す、という事はできればしたくないが、社会人になって会社をしばらく休んで、会いたくないけれど、行かなければいけない。というシチュエーションでは、活かせた。まあ、そんなのはない方がいいだけだが。

高校１年で眠って、ダラダラとひきこもって過ごす事は、母親が許さなかった。私は代々木の不登校の塾に通うようになった。そして、塾長と母の話で、大検（多分、大学検定試験）という大学試験を受けられる資格の試験を受ける事で、この塾に通う事に決めた。

中学３年生の時の話を３つするが、私は音楽がブームの時代に１５歳の時、自分でも鼻歌で、時にギターで作詞・作曲の音楽活動をするようになった。もちろん本気ではないのだが、

良いメロディーが浮かんだら、学校のトイレで何回も歌って忘れないように家に持ち帰った。ある時はテスト中に歌っていたら、ある人から「うるさい！」と言われたが、私もこの旋律を忘れるわけにはいかないと、更に小声で歌ったりしていた。時には、ピアノが得意な人に音楽の授業中、弾いてもらったり、当時はカセットテープでアルバムみたいなものを作って、皆に聴いてもらったりした。その原型で一応今も音楽活動は続けている。

あと、これは中３か高１か、マクドナルドで初めて、バイトを友人とした。３～６か月で自然消滅的に辞めてしまったが、お金が入る感覚を初めて味わった。そのマクドナルドである日、新聞を見て、アルバイトの女性が「なんで！」と怒っていたのだが、サッカーの日本代表の岡田武史監督が、三浦知良選手をメンバーから外した事に怒っていた。私もそれを聞いてカズが外れるの？とショックだったが、これはもうしょうがない。

そして、同じ時期、年末の郵便局の仕分けの仕事をして、これは意外と簡単に作業する事ができた。でも、友人とも話したけれど、「稼いだお金も使うとすぐなくなるね。貯金した方がいいかもね。」みたいな話をしたような気もする。

これは、中学時代だったと思うが、父と、姉と、姉の友達、と私でアメリカに行った。私が海外に行ったのは、それが初めてだった。メジャーリーグに野茂英雄が行った年だと思うが、ロサンゼルスのドジャースタジアムで、野茂が投げるのも観たが、１回から乱調で１回を持たず、代えられてしまった。翌日は父にお願いをして、サンフランシスコのサンフランシスコ・ジャイアンツの球場に観に行ったら、デッドボールで大乱闘になり、全員が本気の殴り合いをして、数人が退場になって、そのまま、また何事もなかったように試合が開始された。その他には、ミュージカルのオペラ座の怪人を観に行ったが、父と私の男２人は、いびきをかいて眠ってしまった。他にもユニバーサル・スタジオ等に行くとか、岩山の観光スポットに行ったと思う。靴屋でナイキのかっこいいシューズを買った。

大検までの生活

高１を終了して、自ら退学して、代々木の不登校の人が通う塾に通いだした。しかし、数人まだ、中学や高校の頃の友達がいたので、草野球チームを作った。自分がノックで育てた選手達だ、セカンドゴロやサードゴロをさばくとか、ヒットを放つ姿には感動した。私はだいたい、９番を打ってのプレイングマネージャーだったが、１回ライトにフラフラと打ちあがって、落ちたヒットを思い出す事ができる。あと、リリーフで投げて、３人をゴロやフライで簡単に打ち取った記憶もある。失敗談としては最終回リリーフで無死２，３塁になり、まず１人を敬遠して、さあ勝負と投げたら、デッドボールでサヨナラ押し出しを献上してしまった事だ。１年位で自然消滅した。

この頃から、家出をするようになった。原因があるケースもあったが、思春期から来る、ちょっとした怒り等もあった。１回家出して公園で寝ようとした事もあったし、友人の家に転がりこんで、塾は行くけれど、家には帰らず、また友人の家に泊めてもらう事もあった。

多かったケースは、交番に「家出してしまいました。」と言って、結局、家に電話してもらい、親が車で迎えに来るというケースが多かった。
　ある時は、店を閉めているおじさんに「家出してしまいました。」と言うと、「ちょっと奥へ来なさい」と言われ、結局、親に電話していただいたのだが、ある O さんというおじさんを教えてもらって、「話しをするとか、勉強を教えている人だからこの人へ通いなさい。」という事で通う事になった。
　だから代々木の塾と O さんの塾の２つを通う形となった。

大学検定取得、保寧寺、O さん

　この頃１７歳位、私はこの頃から、とても大人しくて、静かな性格になっていた。まあ、少し性格の根性は曲がっていたが。代々木の塾でマンツーマンなので、意外と〇（まる）をもらう事もあり、嬉しかったが、若い女性の先生に教えてもらう時には、緊張しすぎて、何も喋れない位の緊張に襲われていた。
　ただ、そこの塾の塾長が、埼玉県の保寧寺というお寺とつながりがあり、ある日、連れていってもらう事になった。２週間という間だけだったが、朝６時に起きて、御経を読み、座禅を２０分位して、朝食という事になる。私は、とにかくわからないなりに、おしょうさんに命じられるままに働いた。ただ、泣きの電話を実家にした事もあるし、窓の拭き方がいい加減すぎておしょうさんに怒られたこともある。ただ、お茶の入れ方を学んだり、火でゴミを燃やしたり、皿洗いをしたりしたのは、いい勉強になった。
　ところで、O さんとあったのは、それから後だろうか？あまりいつから会ったか記憶がない。ただ、昼、子供達に勉強を教えるとか、話しをするとか、夜は朝方まで花屋で年下の人間の元で働いている、という話をしていた。昔はヒッチハイクをしたという話をしていた。私が「僕もヒッチハイクとかした方がいいのですか？」と間抜けな質問をすると、「岡本にはできないだろうな。」と言っていた。あと、私が「海外に３年位行った方がいいですか？」と聞くと、「日本でできない事を海外ではできないだろう。」とおっしゃった。ただ、私が父にこの話をすると、「確かにそうだけれど、とにかく飛び出しちゃう、という考え方もあるのでは？」と言ってくれた。
　で、私は、晴れて大学検定に合格する事ができた。

短期大学に入学、ただ人格形成の時期に遊びほうけてしまう。

　大検を取り、短期大学に試験なしで面接だけで合格する事ができた。ただ、私は、ほとんど大学には行かず、眠ってばかりいた。プロレスの放送が深夜枠だったり、普通に深夜番組を見たりして、まあ、中学生時代からそうだったが、昼夜逆転の生活を送っていた。私が行くとしても、保健室で保健室の女性の先生と話しをしてもらったり、私の大学の担任の女性

の先生の部屋で話しをしたりしていた。印象に残っているのは、哲学の授業に出た時、それでは「あなたが書いた、この文を読んでください。」と言われ皆の前で読んだ事だ。もしかしたら、私は自分に哲学的に考える才能があるのかもしれないと思わせてくれる出来事だった。ただ、他に出た授業はさっぱりわからないし、楽しそうだったフェミニズム論（女性の視点で考える系：全く違うかもしれないが）も１度だけ出たが、あまり面白いものではなかった。

私は、この大学１年、２年、特に１年は時間が有り余っていたので、いろいろな習い事を始めた。結論から言うと、まともに最後までやりきったのは、音楽の歌教室とアコースティックギターである。その他、よく通ったのは格闘技系の教室でキックボクシングや、キックボクシングが自由の時間はサンドバッグにプロレスの技をかけたりしていた。柔術も習った。怪我して辞めたが、柔術が一番楽しかった。アマレスや空手、ボクシングもやった。総合格闘技系のジムにも通った。ただ、私の戦闘能力は高くない。どれも障りだけで辞めているし、自分のパンチ力等もほとんどない。力を入れる感覚が嫌いなのかもしれない。だから、一応、力は入れるけれどそれ程でもない、柔術が一番、肌に合っていたのかもしれない。

歌は、家の近くまで１８歳～２０歳まで通った。最初に唄ったのは尾崎豊の「I LOVE YOU」である。その後、DEEN や T-BOLAN 等も唄った。柔術でも歌でも、とにかくいきなり、やりたい事を本番としてやらせてくれて、基礎、応用ではなく。好きなようにやらせてくれたのが合っていたのかもしれない。ちなみにアコースティックギターでは、一時、発表会にも出た。昔の幼少の頃のピアノの発表会と、この２回だけだろう。とにかく、自費出版ながら、「全７曲のアルバムを辛くても完成させるところまではやろう。」を先生と私との合言葉で完成させた。（ちなみに完成は２０歳で、その２０歳の誕生日にインディーズ・レーベルながら・発売・発表した。）

この本では詳しく書かないが、私は２０００年から、プロレスに完全にはまり出した。きっかけは新日本プロレスの深夜放送に始まり、アメリカンプロレス WWE にもはまっていった。プロレスは今のところ、今でも追いかけているジャンルである。

１８歳だったか、２０歳だったか、定かではないが、私は海外としては２回目となる、ミャンマーにタイ経由の飛行機で行った。初めての海外１人旅、父親の紹介で、ミャンマーの日本語学校で教えている M 先生（女性）が迎えてくださった。印象に残っているのは、その首都ヤンゴンの、仕事をしている人達の活気。「靴を履いている日本人がいるぞ。」という事なのか、小さな子供に「酒を買ってくれ」としつこく追い回された。M 先生の授業風景を見学させてもらい。日本語のテストをしたら、１００点だった。（当たり前だけど・笑）でも、もしかしたら、生まれて初めてテストで１００点を獲ったかもしれなかった。つぶつぶの入った、コーヒーがおいしかったので、まとめ買いした。１９階のホテルにいたら、外は雨だった。ミャンマーはよく雨が降った。交通もめちゃくちゃで怖い程だった。つい、ミャンマーの料理を食べ過ぎて、当時、少し太ってしまった。何か今思い出すと、とても哀愁がある。当時、TTT さん（女性）を紹介してもらった。その子はその後、大阪に来て、私に大

阪を道案内してくれた。
　１８歳の衝撃の一番は、R ちゃんとの出会い。初の「恋の病」だろう。R ちゃんは会社で働きながら、夜の店で働いていた。そこに私が訪れたのだ、とにかく綺麗でかわいかった。その日は何気なく会って、帰った。すると後日、忘れた頃にメールで「待っています。」と来て、行ったのだ。２回目の時は、R ちゃんは少し風邪をひいていたのか、寒そうにしていたのが印象的だった。そうして、過ごしているうちに、R ちゃんの事ばかり考えるようになった。ミュージシャンのライブにも行った。新宿とかで買い物していたら、ケンカした事もあった。自分もその頃、まだ、思春期で気性が激しかったから、プレゼントだけ渡して、帰った事もある。でもその時は帰ろうと駅についたら「どこに行ったの？」とメールが来ていて、「今日はとりあえず帰るね。」みたいな事もあったと思う。１９歳の時は思い出があまりないのだけれど、R ちゃんにかっこいいところを見せるぞ。とか急に思って、突発的に１２時間バイトの面接に行った事もある。ただ、あまりにも体が辛すぎて、最後ボロボロになって、なんとか１万円の給料をもらって、本当になんとか家まで辿り着いた。その後はベッドで寝たけれど、あっという間にその１万円も使ってしまったかもしれない。こんな言い方はないけれど、一番深い愛をしたけれど、一番重たい愛だったかもしれない。
　というわけで、大学１～２年生、１９歳もなんとか大学に行ったり、遊んだりして、過ごしていたと思う。

　短期大学卒業

　あまり深くは書かないが、ここから３回入院するハメになる。
　短期大学には、出席の単位が足りないという事だったが、入院したため、学校側がレポートを提出すれば、卒業を認める。という事だったので、病院の中で勉強をして、レポートを書いて卒業する事ができた。ただ、私がマヌケだったのは、大学を卒業したらどうするのか？というビジョンが全くなく、病院を退院した後、とりあえず、先にも出した、保寧寺に泊まらせてもらう予定だったが、どうしても実家に帰りたくなり帰ってきてしまった。
　そして、友人等と第１次草プロレス「WRH（ワールド・ランク・ホルダー）」を４人で始めて、数回で幕を閉じた。

　１０年ぶりの N さんの声

　１０年ぶりに、何故か私が皆に電話して、小学校の同窓会を開く事になった。
電話ボックスから、昔、好きだった、N さんと話す事ができた。「同窓会には行かない。」という返事だったが、元気そうで良かった。同窓会は、私も行かなければ良かったと思う程だ。
　そして私はまた入院した。しばらくして退院すると、今度は千葉県に住む事になった。
そこで一人暮らしの練習として、まずはウィークリーマンションという高いのだが、生活用

品が揃っている場所に住み、一人暮らしのトレーニングをした。ただ、私にはいわゆる所属する場所がなかった。家はあるけれど、所属する場所がなかった。ただ、ウィークリーマンションは高いので、１Ｋのマンションに住む事にして、夕方まで眠って、夜の店に行く事が多くなった。

Ｓちゃんとの出会い。

小学校時代のＮさんからは、恋人であったという許可を頂いていない。他の子からももらっていないが、Ｒちゃんは私が完全に恋をした。いわば、本当の恋であった。（Ｎさんも自分は小学生ながら本当の恋ではあるのだけれど）そして、一番、楽しい恋愛をできたのは、フィリピン人のＳちゃんである。Ｓちゃんはスナックで働いていた。Ｒちゃんの時とケースは似ていて、１度お店に行って、家にいたら「来てよ。」みたいな感じだったので、それからは指名するようになった。顔はゴルフの宮里藍ちゃんのようで、やや濃い肌をしているが、かわいい感じの顔だ。同伴出勤もしたし、東京ディズニー・シーにも行った、ケーキも一緒に食べたし、ステーキもごちそうした。でも２人は別れた。
私はまた、病気になった。
私は郵便局の面接に受かったのだが、病気が原因で親が断ってくれたらしい。
私はまた、入院した。

デイケア

長い入院生活の後、その病院でデイケアの生活が始まった。テニスや卓球、英語や漢字、国語・・他、と社会に馴染む訓練のようなものだ。ここでもテニスコートでケンカしてしまったりしたが、それはともかく、兄の勧めで、「パソコン検定を受けてみたらどうだ？」という話をしてもらい、パソコン検定４級と３級に受かる事ができた。（私からしたら、準２級というのも受けたが、難しすぎた。）

Ｃちゃん

今、仮に３４歳だとして、２８歳で別れたから、もうかれこれ６年間、私には彼女はいない。病気でお酒も飲めなくなったし。仕事もしていないのに、シラフで女の子達と話しても面白くないだろうとか、だんだんそういう方向に行っている。お金もかかるし。Ｃちゃんは入院時代に知り合った、お店で出会うのも素敵だけど、普通に出会った形としては初めての恋人だった。２人の間ではプロポーズの言葉は、Ｃチャン曰（いわ）く「悠君が、『俺、Ｃちゃんの恋人になる。』」と言ったらしい。というか、私もそういったのを覚えている。Ｃちゃんとはいろいろ思い出がある。料理を一緒に作った事、２４（トウェンティ・フォー）とい

う映画を借りて見た事。私のアメリカンプロレス、WWE の DVD に付き合って見てくれた事。音楽を片耳ずつはめてウォークマン（音楽器）で聴いた事。トロちゃんやクロちゃんのゲームで遊んだ事。公園に行った事。サッカーの J リーグを観に行った事。西武ドーム（現、西武プリンスドーム）に行った事・・。
俺の何がいけなかったの。最後には一人になる。
　ただ、その頃に私は並行して、２７歳から作業所に通いだした。１分３円、６０分１８０円位の工賃だった気がする。違うかもしれない。ただ、それも６か月位通って辞めてしまった。

　インターネット古本屋に務める

　２００８年１２月１日～インターネットの古本屋に務めだした。いろいろトラブルもあったけれど、せめて、「石の上にも３年」「風雪５年」という形で通う事はできた。５年と６日月は通った。最近は１か月に２・３度、上司とお話しをする形を取っている。今３４歳である。
　この間に３０歳、２０１２年の時に、第２次草プロレス「WRH（ワールド・ランク・ホルダー)」を２～３人で始めたが、これも約１年で消滅した。
　今は、とにかく、「プロレスコラム」を書いたり、「本」を読んだり、「音楽」活動をしたり、「本」を書いたり、している。とにかく、自分の好きな事をして、稼ごうと、稼げなかろうと、生きていきたいと思う。

２０１６年１０月２６日（水）　　文：岡本　悠

あとがき

インタビュー

・昔からどんな子供でした。
：元気な子供だった気もする。小１では世田谷のわんぱく相撲大会で優勝して、同じ年、神社の相撲大会でも優勝した。けっこう皆をまとめたりして遊ぶのも好きだったから、公園で野球をいつもしていた。野球が好きだったから家の前で１人でも壁当てするとか、素振りもしていた。小２、小３まで少年野球をやって、中学から部活という意味で本格的に軟式野球も始めた。
・長距離走も速かったようですが。
：幼稚園の時は短距離も速かったけれど、小学、中学と短距離はあまり速くなくて、長距離は中２までは速かった。中１、中２とマラソン大会で２位を２回獲ったから。
・野球には燃えていたようで。
：野球は小学生が、背番号３８、２１、２。中学生が３で、５番ファーストだった。三振をした記憶は１回しかない。覚えているヒットは、一塁線へのサヨナラタイムリーヒットとレフトオーバー同点タイムリー２塁打、あと当時のビデオに映っていた、センター前へのヒット、だけどそのビデオにその後、盗塁失敗も映っていた。
・素振りの思い出は。
：素振りは１回だけ、１０００回やった日がある、あれはしんどかった。
・守備の方が好きなのですよね。
：守備の方が面白い。背面キャッチも当時はできた。あれは慣れれば簡単だけど。
・その後、高校を中退した時に、草野球チームの監督になりました。
：育てた選手が巧くなって、試合でサードやセカンドで、ゴロをさばいているのを見た時は感動した。
・野球からだんだん興味がプロレスの方に行きましたね。
：プロレスは今でも好き。アメリカや、日本等。
・草プロレス「第１次、WRH（ワールド・ランク・ホルダー)」を発足しました。
：３・４人です。２００２年の話です。
・草プロレス「第２次、WRH（ワールド・ランク・ホルダー)」も行われました。
：１０年後の２０１２年の話です。２・３人でした。解散した。
・音楽でもインディーズ・レーベルで自費出版の CD を出しました。
：７曲入りの CD でした。ただ、あまり最近は音楽に興味はないのです。と言いつつ、自分の HP には、自分の曲を載せる作業は好きなのですけれど。

・まだ、音楽は載せるのですか。
：一応、まだ作りかけがあるので、早く載せたいか、もう辞めたいかです。
・初恋は
：幼稚園の先生です。
・次は
：小学５年生で隣のクラスのＴさん。
・次は
：同じクラスのＮさん。
・次は
：自分が１８歳～２０歳位の、Ｒちゃん。年上の女性。
・次は
：千葉で出会った、Ｓちゃん。フィリピン人の女性。顔は丸顔で少し濃い顔をしていて、ゴルフの宮里藍ちゃんみたいな、かわいい感じ。これまた年上の女性。
・次は
：Ｃちゃん。これが最後の恋人だ。これも１歳年上の女性。今、自分が３４・５歳として、２６～２８歳位から、ずっと彼女はいない。もう臆病になったし、１人の方が気は楽だ。自分は。
・そんな感じですか。
：たいした恋愛もしてないけれど、この数人のデータだけで、A4 サイズ１枚位のお話し、短編小説を作るのもありかもしれない。あんまり、物語を書くのは興味ないけれど。